

ダウン症の子どもを出産してから成人に至るまでの経路

The mother's way which makes Down's syndrome babies to adult

植田 美由紀

Miyuki Ueda

国際医療福祉大学大学院博士課程

International University of Health and Welfare Graduate School

Key words: TEM、ダウン症、母親

目的

出産や子育てに関する母親の研究は先行研究も多くみられるが、ダウン症を抱えた子どもの母親は健常児を産み育てた母親と比較した場合、自身が描くライフコースは異なるものと考えられる。本研究では、ダウン症に先天性心疾患を合併し手術が必要となり、実父の言動や周囲の方々との交流により、豊かな人生を送っていると考えられる母親のこれまでの葛藤や困難を伴うライフコースとその機序を明らかにすることを目的とする。

方法

平成29年4月～8月中に合計3回、半構造化面接によるインタビュー調査を各回とも約3時間実施した。調査対象者は、先天性疾患を持ったダウン症者の50歳代の母親である。インタビュー調査は調査対象者からの同意を得て毎回録音し、それらを逐語録作成のうえ纏め、その都度調査対象者から相違ない内容かの確認を得た。インタビュー内容の逐語録から、KJ法により分類しカテゴリー化した。その分類項目に沿って、調査対象者がどのように過ごされてきたか、また周囲からの影響を時系列に可視化できるTEM図を作成し、調査対象者の時間的変化と心理的変容を表す。

本調査については、国際医療福祉大学大学院研究倫理審査委員会より承認(16-Io-91)を受けて実施している。

結果

調査対象者の複数回の語りから、その内容をKJ法による分類をもとにTEM図を描いた。それらを6つに区分し、それぞれ「出産前」「出産と障害の判明」「乳児期」「幼児期」「学齢期」「成人期」として表し、特に「出産から成人期」について焦点を当て分析した。

母親が出産後からのライフコースの影響を及ぼした様々な要因を、SD(社会的ガイド)例えば「親戚に申

し訳が立たない」及びSG(社会的方向づけ)例えば「手術は受けさせないといけない」「育てられないならここに置いて行け」と、母親の逐語録をもとに表現した。また、TEMの時間を捨象しない1つの特徴により、本人の意思とは関係ない出来事を必須通過点(OPP)例えば「障害の判明」とし、母親が1つの選択を行う分岐点(BFP)例えば「家庭で育てる」から、等至点(EFP)「自分で育てていく」と両極化した等至点(P-EFP)例えば「手術は受けない」など、心理的変容が複数回発生している様子を矢印で表現し、選択や経路が様々な方向へ働いていたことを示した。

本調査対象者の場合、重要な分岐点となったのはSGである実父からのことばや行動であり、現在は、EFPとして何の苦労もない子育てであったと回想していた。

考察

本研究は1人のダウン症と先天性の心臓病を併せ持った子どもを出産した母親の語りを、KJ法による分類とTEM図を併用することで、機能・構造と過程・発生の両面からライフコースを可視化した。これまでの経験やその時間は個人によって多様であり、周囲の影響が心理的変容の要因になることが明らかとなった。自分の子どもがダウン症と先天性心疾患を持って産まれてきても母親のライフコースは様々であり、その子どもと関わることによって、より豊かな人生を送ることができたと語る1人の母親のこれまでのあり方は、ダウン症児を育児する母親へ影響し発展していく課題としたい。

参考文献

1. サトウタツヤ. 質的心理学の展望. 初版第1刷. 新曜社. 2013
2. 安田裕子ほか. TEA実践編 複線経路等至性アプローチを活用する. 初版第1刷. 新曜社. 2015
3. 川喜田次郎. 続・発想法—KJ法の展開と応用. 初版第1刷. 中央新書. 2013